

伊勢神宮参詣 松尾芭蕉と西行法師

恒 松 侃

元禄二年（1689）八月二十日頃、奥の細道旅行全行程六百里を踏破して、美濃国大垣に到着した松尾芭蕉は、約二週間休養を兼ねて当地に逗留していたが、紀行文『奥の細道』によれば、「旅のものうさとも、いまだやまざるに、

長月六日になれば、伊勢の迂宮せんぐうおがまんと（長旅の疲れもまだ抜け切っていない重い気分ながら、九月六日になったので、十日の伊勢神宮の遷宮式を拝もうと）、九月六日大垣船町川湊より船に乗って水門川を下り、伊勢に向かった。伊勢到着は十一日、内宮の遷宮式は既に終わっていた。だが十三日の外宮の第四十六回式年遷宮の儀式を拝する事が出来、この時に詠まれた句が、「尊せんさに皆おしあひぬ御遷宮」である。この句の句碑が、平成二十五年（2013）四月十四日、第六十二回式年遷宮式に併せて、JR参宮線伊勢市駅前広場に建立された。黒御影石の大変美しい句碑であ

る。この句碑も合わせて、現在伊勢市内には、芭蕉の句碑が八基建立されている。その八基のうち七基は、芭蕉が伊勢に来て詠んだ句である。

1. 道の辺の木ちくげは馬に喰はれけり

貞享元年 野ざらし紀行

詠句場所 馬上吟 佐夜中山付近

句碑 伊勢市岡本三丁目豊宮崎文庫跡

2. 何の木の花とは知らず句哉

元禄元年 笈の小文

詠句場所 伊勢山田

句碑 伊勢市岡本一丁目祖霊社境内

3. 藪椿門むすぶは葎の若葉哉

元禄元年 真蹟詠草

詠句場所 二乗軒（伊勢市船江大江寺境内草庵か）

句碑 伊勢市船江三丁目瑞泉院境内

4. 神垣やおもひもかけず涅槃像

元禄元年 笈の小文

詠句場所 伊勢神宮外宮の館

句碑 伊勢市朝熊山金剛証寺境内

5. 焔の風伊勢の墓原なほすこし

元禄二年 花摘

詠句場所 伊勢中村

句碑 伊勢市一之木一丁目常明寺境内

6. 門にいれば蘇鉄に蘭の句哉

元禄二年 笈日記

詠句場所 伊勢浦口守栄院

句碑 伊勢市浦口町法住院境内

7. うたがふな潮の花も浦の春

元禄二年 泊船集

詠句場所 二見が浦

句碑 伊勢市二見町二見浦海岸

8. 尊さに皆おしあひぬ御遷宮

元禄二年 真蹟懷紙

詠句場所 伊勢神宮外宮

句碑 J R 参宮線伊勢市駅前広場

松尾芭蕉は伊勢に来て二十四句詠んでいる。貞享元年

（1684）に四句、元禄元年（1688）に十三句、そして元禄二年（1689）に七句である。注釈書等に記載されている松尾芭蕉の伊勢旅行は、貞享元年野ざらし紀行旅行の時、元禄元年笈の小文旅行、そして元禄二年奥の細道旅行後の三回である。だが実際は松尾芭蕉は、六回以上伊勢を訪れている。それを証明するものとして、貞享五年（1688）二月記述の俳文伊勢参宮（何の木の花の詞書、出典花はさくら）に、「貞享五とせ如月の末、伊勢に詣つ。此御前のつちを踏事、今五度に及び侍りぬ。」とあり、この五度に元禄二年九月の参詣を加えると、合計六回芭蕉は伊勢に赴き、伊勢神宮に参詣した事になる。

松尾芭蕉は江戸下向以来、俳諧活動の拠点になった地域以外は、その訪問した地に数日間、十数日間滞留する事はあっても、再度訪問する事はなかった。足掛け六箇月の日数と、六百里の行程をかけた奥の細道旅行においても、その旅行中に日程の都合上再度訪問した場所はあっても、旅行後改めて訪問する事はなかった。その芭蕉に対して西行法師は、例えば奥州旅行を、康治二年（1143）春頃と、四十二年後の文治二年（1186）七月頃と、二度行っている。

松尾芭蕉の江戸下向後の、俳諧活動等による多数回滞留箇所及び滞留回数は、次の表の如く七箇所である。

多数回滞留箇所	滞留回数
伊賀上野帰郷	十二回
大津滞留	十二回
京都滞留	十一回
膳所滞留	七回
名古屋・熱田・鳴海滞留	六回
伊勢滞留	六回
大垣滞留	四回

松尾芭蕉は貞享五年二月の俳文伊勢参宮によって、伊勢神宮に六回参詣した事になっているが、実際はこの回数以上に、伊勢神宮に参詣していたのではなからうか。その理由として、松尾芭蕉は、寛文十二年（1672）春江戸下向以来、前表が示す如く、郷里伊賀上野に十二回帰郷している。この十二回の帰郷の中で、僅か数日間滞在したのもあれば、一箇月滞留が二回、二箇月以上滞留が二回、三箇月滞留が一回ある。勿論この長期滞留中に俳事を重ねたり、郷里において何かと忙しい日々を送る事が殆どであったかと思われるが、貞享五年帰郷中、「伊賀の山家にありて」と題して、「手鼻かむ音さへ梅のさかり哉」（蕉翁句集・土芳編）と詠んでおり、このような長閑な伊賀上野滞留中の句もある。

松尾芭蕉は伊賀上野滞留中に、何回かは伊勢参宮を行っていたのではなからうか。元禄時代津を經由して、伊賀上野から神宮までの伊勢街道は既に整備されており、伊賀上野からの伊勢参宮は、大変しやすかったのではなからうか。伊勢は俳諧の祖である荒木田守武ゆかりの地であり、従って神宮神官や御師達に俳諧を嗜む者が多く、芭蕉の門人等も多く、俳諧興行等も屢行たびたびわれていたようである。

三重県津市柳山津興に、阿漕塚という塚があり、石碑が建てられている。津市の指定史跡になっていて、伊勢参宮名所図会に収録されていて、その阿漕塚について津市観光協会は、次のような内容の、阿漕塚の由来と題した掲示板を、塚の傍らに建てている。

この塚の近くの阿漕浦海岸は、伊勢神宮御用の禁漁区で、魚を捕獲する事の出来ない場所になっていたが、平治という親孝行な漁夫は、矢柄やがらという魚が母の病気の妙薬であると聞いて、禁制を犯して矢柄を捕った為捕えられて、その掲示板に記してある。「あこぎだ（やり方がひどすぎる）」という言葉の語源になった事件で、後に土地の人々が平治の霊を慰め、孝心を讃える為に阿漕浦近くのこの場所に、建立期日ははっきりしないが塚が築かれ、天明二年（1782）この塚の上に阿漕塚碑が建てられ、その塚に

は現在でも献花が絶えない。

松尾芭蕉は期日は未詳であるが、勿論石碑建立以前であるが、伊勢参宮の途中そこを訪れ、「月の夜の何を阿古木に啼く千鳥」と詠んだ。大変有名な句であるが、この句は野ざらし紀行にも、笈の小文にも収録されていない。松尾芭蕉の他の句集にも収録されていない。塚が築かれている阿漕塚公園には、松尾芭蕉のこの句の句碑が建立されている。文化十三年（1816）建立と、句碑の背面に記されている。平治伝説は謡曲阿漕として戯曲化されているので、芭蕉は早くからこの伝説を知っており、伊賀上野から伊勢神宮参詣の途次、この塚に立ち寄って句を詠んだものであろう。

松尾芭蕉の神仏への参詣の念は強く、鹿島紀行の如く参詣だけを目的とした旅行もあれば、名古屋・熱田・鳴海に滞留中は必ず熱田神宮に参詣し、笠寺の天林山笠覆寺、名古屋円頓寺、新道の法蔵寺、大曾根成就院（現妙見山了義院）等、数多くの神社・寺院に参詣している。松尾芭蕉の奥の細道旅行目的は、能因法師や西行法師等の歌枕探訪、東北・北陸各地で俳事を重ねる事であったが、曾良隨行日記の記録によれば、奥の細道旅行中芭蕉は、五十三箇所（神社・寺院）に参詣している。これら五十三箇所の神社・寺院参詣は、勿論宿泊を目的として立ち寄り、参詣した所も数箇所

はあるが、六月三日から六月九日にかけて登頂した出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）参詣は、単なる物見遊山の参詣では、果たし得ない登頂である。三山に対する強い信念と信仰心がなければ、絶対に参詣する事は出来ない。羽黒山は現世を意味する山で標高は四一四m、月山は死の世界を意味する山で標高は一九八四m、そして湯殿山は再生を意味する山で標高は一五〇〇m。何れも険しい山々で、壮年を過ぎ旅に疲れた体で登るには、あまりにも厳しく険しく、芭蕉は奥の細道に月山参詣の事を、「雲霧山気の中に氷雪を踏ふみでのぼる夏八里、更に日月行道じつげきやうどうの雲関いんかんに入かたあや生まれ、息絶へ身こゝろこへて頂上に至れば、日没ぼくて月あらはる。笹を鋪、篠を枕として、臥かたて（雲や霧や山の気配の満ち満ちた中に、凍った雪を踏んで行く。八里程登ると更に太陽や月の通り道である雲の中に入ってしまうのではないかと怪しく思われる程で、息が出来なくなり、体も凍えてしまう。頂上に着くと太陽が沈み、月が昇って来る。笹を敷き篠を枕にして寝る。）と記している。芭蕉は奥の細道旅行出発当初から、出羽三山参詣を望み、強い信念と厚い信仰心でもって、登頂参詣を果たしたのであろう。

五月十七日松尾芭蕉は尾花沢に到着し、鈴木清風を訪ねている。その時の事を奥の細道に、「尾花沢にて清風と云いふものを尋ぬ。かれハ富とほるものなれども、心ざしいやしからず。都にも折まるかよひて、さすがに旅の情をもしりたれ

バ、日比とゞめて、長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る（尾花沢で清風という者を訪ねた。この人は金持ちではあるが、金持ちにありがちな心の卑しさが無い。また都にも折々往来して旅の気持ちも知っているので、自分達を何日も引きとめ、長旅の労をねぎらい、いろいろともてなしてくれた）」とあり、曾良隨行日記にも五月十七日清風宅に到着し、翌十八日に尾花沢養泉寺に移り、二十一日、二十三日は清風宅に宿泊するが、他の日は養泉寺で俳事を重ねていた事が記されている。結局は芭蕉は七日間養泉寺で過ごす事になるのだが、このように宿泊し俳事を行う事も、寺院参詣の理由なのである。清風が芭蕉を養泉寺に案内した理由は、地元尾花沢の多くの俳人達が気楽自由に芭蕉を訪ね、俳事を重ねる事が出来るようにとの配慮によるものと伝えられている。そして清風や尾花沢の人々の勧めによつて、予定外ではあったが立石寺に参詣し、あの名句「閑さや岩にしみ入蟬の声」を詠んだのであった。

伊勢神宮は、松尾芭蕉にとつて、決して参詣しやすい神社ではなかった。貞享元年（1684）八月二十日頃、芭蕉は野ざらし紀行旅行中、十日間伊勢に滞留している。その時の様子が、野ざらし紀行に記されている。

松葉屋風瀑が伊勢に有けるを尋音信て、十日計足をとゞむ。腰間に寸鉄をおびず、襟に一囊をかけて、手に

十八の珠を携ふ。僧に似て塵有、俗に、て髪なし。我僧にあらずといへども、浮屠の属にたくへて、神前に入事をゆるさず。（松葉屋風瀑がちょうど伊勢に居合せたのを尋ねて行つて、十日ほど滞在した。私の姿は、腰に短刀一つ差さず、首に頭陀袋をかけ、手に数珠を持つている。僧のようだけれども、俗人めいており、俗人のよう

でいて頭に髪を結っていない。そんな格好の私は、僧ではないのだが、髪を結わないものは僧侶の仲間とみて、神前に入ることを許されない。）

神道には二つの系統がある。唯一神道と称する系統と、両部神道と称する系統である。唯一神道と称する系統は、儒教や仏教等の他の宗教の教義を一切取り入れない、純粹の神道を主張する派で、神仏混淆を嫌う。伊勢神宮はこの唯一神道系統に属し、従つて僧尼及び僧尼らしき風体をしている者が、神前に額づく事を拒否して、どうしても参拝を希望する者に対しては、僧尼拜所が設けられているから、そこから遙拝する事になつていた。内宮の場合は現在の風日祈宮橋の辺りから、外宮の場合は多賀宮付近から遙拝する事になつていた。松尾芭蕉は俗人であるが、剃髪をし頭陀袋を下げていたので、僧侶と見なされた。

両部神道は神仏一体を説く派で、神と仏とは同体であり、天照大御神は大日如来であると説く本地垂迹説に基づく信仰を取り入れている。松尾芭蕉が最も心を許す八幡神社系

統は、この派に属している。八幡神社系統は、僧尼の神前参詣に対しては非常に寛容である。

松尾芭蕉は元禄三年（1690）四月六日から七月二十三日まで、大津国分山幻住庵に滞留した。その入庵に当たって、幻住庵記（『猿蓑』所収本）冒頭に、次の如く記している。

石山の奥、岩間のうしろに山有、国分山と云。そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮た、せたまふ。神体は弥陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を、両部光を和げ、利益の塵を同じうしたまふも又貴し。日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ、根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云。（石山の奥で、岩間山の後ろに山がある。名を国分山と言う。昔、国分寺のあったのがこの辺であるが、その名を伝えているのである。麓の細い流れを渡り、山の中腹へ登る事三曲り二百歩程で、八幡宮が建っている。御神体は阿弥陀の尊像だとか。唯一神道の家では甚だ嫌う事であるが、このお社は神仏一体の両部神道で、神と仏が互いに鋭い光を和らげ、俗塵の中で利益を施して下さる事も、また尊い事である。普段は参詣する人もないので、大変神々しく物静かであって、その傍らにある人の住み捨てた草庵

がある。蓬や根笹が生い茂って軒を囲み、屋根は雨漏りがし、壁は落ちて狐や狸がよい寝場所になっている。名を幻住庵という。）

幻住庵の傍らに現在でも神社が鎮座しているが、この神社が八幡神社（近津尾八幡社）なので、芭蕉が安堵している様子をうかがう事が出来る。

平成十九年（2007）二月二十二日、全国における神社鎮座数は四〇四〇四社であると、神社本庁の全国神社祭祀祭礼総合調査のデータが、朝日新聞朝刊に掲載された。その鎮座数の内訳で、最も鎮座数の多いのは八幡社系列神社で七八一七社、次いで伊勢神宮系列神社で、鎮座数が四四二五社であると記載されている。八幡社系列神社の鎮座数が、伊勢神宮系列神社の鎮座数の凡そ二倍であるという事は、それだけ八幡社関係神社の信者が多いという事にならないか。そして伊勢神宮の神仏混濁を嫌う唯一神道制度に対して、反発不満を抱いている者が多いという事を意味していないだろうか。江戸時代、ある有名な僧侶がその制度に反発して、内宮正宮直前に近づこうとして禰宜達に阻止されて、結局は従わざるを得なかったという話が翁草（安永七年・1778刊）に収録されているという。

伊勢神宮に対する信仰心が厚い西行法師が、「大神宮御祭日詠める」と題して「何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼる」と詠んだと伝えられ、西行法

師家集（西上人集・延宝二年・1674刊）に収録されていると伝えられているが、神前に近付けないはずの西行法師が、どうしてこのような感極まる歌を詠む事が出来たのであろうか。江戸川柳に、それは付鬢つけびんと称する鬢むすを被かぶって、西行法師は神前に額ぬかづき、その鬢は御師の戸棚に用意されていて、西行法師は一般の人々に混まって参詣したであろうとし、江戸川柳（誹風柳多留）は「付鬢で涙こぼるる歌を詠み」と、西行法師の参詣の様子を伝えている。だが西行法師の伊勢神宮参詣は、僧尼拜所からの遥拝、付鬢による参拝だったのであろうか。そして西行法師の時代、僧尼拜所・遥拝所は存在していたであろうか。

千載和歌集卷第二十神祇歌に、西行法師の次の歌が収録されている。

高野の山を住みうかれて後、伊勢国二見浦の山寺に
待りけるに、大神宮の御山をば神路山と申す、大日
如来の御垂跡を思ひてよみ侍りける。円位法師

深くいりて神路の奥を尋ぬれば
又うへもなき峯のまつ風（一二七五番）

（国歌大観 角川書店刊）

円位法師とは西行法師の事である。法名の事である。右の歌の詞書「大日如来の御垂跡（迹）」は、両部神道の思想であって、西行法師はこの思想でもって、右の歌を詠んだ事になる。

西行法師の神道に対する思想は、本地垂迹（迹）思想であって、西行法師はこの思想でもって伊勢神宮参拝に臨み、神前に額ぬかづいて参詣したのではなからうか。そして当時の伊勢神宮には、僧尼拜所や遥拝所等は設けられてはおらず、僧尼達は直接神前に進み出て、額ぬかづく事が出来たのではなからうか。西行法師も直接神前に進み出て、その忝かたじけなさ心打たれ、涙がこぼれ出たのではなからうか。

十数年前の事である。初詣でで内宮に参詣した時、突然背後正宮石段下で御詠歌を唱える声がして、吃驚仰天し思わず振り返ってみると、十数人の老婦人が全員揃いの黒い紋付き羽織を来て、手に数珠を鳴らして合唱していた。御詠歌は仏教信者が仏の徳を称えて合唱するものであると心得ていたから、最も神々しい場所である内宮正宮直前でその響きを聞こうとは、夢にも思っていなかったから、腰を抜かささんばかりに驚いた事は言うまでもない。しかし今考えてみると、その老婦人の一団は、両部神道関係の信者の団体であって、天照大御神を大日如来としてとらえ、御詠歌を合唱していたのかもしれない。

伊勢神宮は江戸時代には既に唯一神道に属していたから、従って松尾芭蕉は野ざらし紀行で記している如く、「腰間に寸鉄をおびず、襟に一囊をかけて、手に十八の珠を携ふ」とあるから、僧侶とみなされて、神前に額ぬかづく事が許されなかった。このような状態に置かれている松尾芭蕉が、

全く思いがけない情景に出会った。元禄元年の笈の小文旅行で、同伴者坪井杜国と落ち合う為に、伊勢に赴いた時、外宮の神垣の辺り、外宮の館で涅槃像を拝する事が出来た。外宮の神垣の辺りは、最も仏事を忌む所だと芭蕉は思っていたので、芭蕉は「神垣やおもひもかけずねはんぞう」と詠んだ。笈の小文に収録されている。

涅槃像とは釈迦如来入滅の像（絵）の事で、二月十五日釈迦如来入滅の日、各寺院でこの像（絵）を掲げ、釈迦如来の霊を弔うのであるが、松尾芭蕉は図らずも、しかも外宮の館で、その涅槃像を拝する事が出来たと感動して詠んだのである。館とは伊勢神宮で神饌を奉仕する最も神聖視された童女が詰める建物であるから、芭蕉が驚き感動して句を詠むのも無理はない。

伊勢神宮への厚い信仰心を持ちながらも、法師人（僧侶）の出立である為、神前に近付く事が許されなかつた松尾芭蕉が、何故に六回以上も伊勢参詣を行ったのであろうか。勿論それは伊勢神宮に対する松尾芭蕉の信仰心の厚さによるものであるが、伊勢神宮参詣の最大の原因は、西行法師との関係にあったのではなからうか。

西行法師は治承四年（1180）から文治二年（1186）にかけて、約六年間伊勢に滞在している。初めは二見浦の安養山に草庵を結び、後に神路山の山麓谷間（後世西行谷と称せられた所）に草庵を結んだとされている。西行法師

は伊勢に滞在するに当たって、次の歌を詠んでいる。本地垂迹思想に則つての歌で、山家集下雑に収録されている。

伊勢に罷りたりけるに、大神宮にまゐりて詠みける
榊葉に心を掛けん木綿しでて
おもへば神も仏成り（一二二三番）

西行法師は伊勢滞在中に、二十五首詠んでいる。松尾芭蕉は伊勢滞在中に、二十四句詠んでいる。芭蕉詠句二十四句のうち七句が、西行法師に因んでの詠句である。関係する西行法師の歌及び故事と芭蕉の句とを掲げる。

1. 深くいりて神路の奥を尋ぬれば又うへもなき峯のまつ
風（千載和歌集卷第二十神祇歌・一二七五番）

（芭蕉）暮て外宮に詣侍りけるに、一ノ華表の陰ほ
のくらく、御燈処に見えて、「また上もなき峯の
松風」身にしむ計、ふかき心を起して、

みそか月なし千とせの杉を抱あらし（野ざらし紀行）

2. 西行法師、江口の遊女との故事。（撰集抄）

（芭蕉）西行谷の麓に流あり。をんなどもの芋あら
ふを見るに、

芋洗ふ女西行ならバ哥よまむ（野ざらし紀行）

3. 同じく西行法師、江口の遊女との故事。

(芭蕉)その日のかへさ、ある茶店に立ち寄りけるに、
てふと云けるをんな、「あが名に発句せよ」と云て、
白ききぬ出しけるに、書付侍る。

蘭の香やてふの翅にたき物す

(野ざらし紀行)

4. 何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさに涙こぼるる (西行法師家集)

(芭蕉) 西行のなみだをしたひ、増賀の信をかなしむ
何の木の花ともしらず匂ひかな

(笈日記)

5. 昔、増賀上人といふ人いまそかりける。あるとき只一人伊勢大神宮に詣でて祈請し給ひけるに、着給ひける小袖衣、みな乞食どもにぬぎくれて、一重なる物をだにも身にかけてたまはず、赤裸にて下向し給ひける。

(撰集抄・増賀聖故事)

はだかにはまだ衣更着のあらし哉

(笈の小文)

6. 伊勢の二見の浦に、さる様なる女の童どもの集まりて、わざとのこととおほしく、蛤をとり集めけるを、いふ甲斐なき蟻人こそあらめ、うたてきことなりと申ければ、貝合せに京より人の申させ給たれば、選りつ、採るなりと申けるに
今ぞ知る二見の浦のはまぐりを貝合せとて覆ふなりけ

り (山家集下雑 一三八六番)

(芭蕉) 蛤のふたみに別行秋ぞ

(奥の細道)

7. 西行上人二見浦に草庵を結びて、浜荻を折りしきたる様にて、あはれなるすまゐ、見るもいと心すさむまななり……硯は石のわざとにはあらで、もとより水いるるところなど窺みて、硯のやうなるが筆置く所などもあるを置かれたり。

(芭蕉) 硯かと拾ふやくぼき石の露

(元禄二・九・二二付杉風宛書簡)

西行法師を敬愛し、その足跡を辿り、西行法師の詠歌、故事に即して句を吟じる松尾芭蕉の旅行は、伊勢にだけにとどまらず、野ざらし紀行の旅行も、笈の小文の旅行も、芭蕉の足を、西行法師の足跡に向かわせている。

芭蕉は野ざらし紀行に、次の如く記している。吉野に赴いて、西行庵跡を訪れた時の文章である。

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町計わけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかに有て、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。彼とくくくの清水は昔にかへらずとみえて、今もとくくくと零落ける。(西行上人の草庵の跡は、奥の院から右の方へ二町ほど草深い道を分け入った辺り、柴刈りの行き来する道だけが辛うじて

通じていて、険しい切り立った谷を隔てて、向こうの山に対しては、その奥深い様は実に尊く感じられる。西行上人の歌で名高いあのとくとくの清水は、昔と変わらないと見えて、今もとくとくとく雫が落ちてゐる。

山家集無収録であり、吉野山独案内に収録されていると伝えられているが、西行法師は吉野山の草庵で、「とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすまでもなき住居かな」と詠んだと伝えられ、芭蕉もこの吉野の地において、「露とくとくと心みに浮世す、がばや」と詠んでおり、野ざらし紀行に収録されている。西行法師のこの作品は誤伝だとされているが、松尾芭蕉がその事を心得ていたかどうかは不明ながら、この「とくとくとく清水」の表現が芭蕉はとても気に入っていたと見え、米沢家本幻住庵記にも、「たまく心すこやかなる時は、薪をひろひ清水をむすぶ。こしだ・ひとつばのみどりを伝ふとくとく雫を侘て、一炉のそなへいとかるし。」(偶に心の元気な時には薪を拾い、清水を汲む。小羊齒や一葉の緑の葉を伝う雫に、西行法師が「とくとくとく」と詠んだあの「とくとくとく清水」の侘しさを慕い、炉一つあるだけの軽々とした暮らしである。)と記している。

西行法師は仁安三年(1168)十月に四国旅行に出発し、崇徳上皇の白峰御陵に参詣し、善通寺で草庵を結び、越年して弘法大師足跡を巡礼するが、芭蕉もそれに倣って

四国旅行を試みようとした。しかし芭蕉の健康を気遣った菅沼曲翠(膳所藩士・芭蕉門人)に止められてしまった。

元禄二年(1689)三月の奥の細道旅行の行程は、二度にわたる西行法師の奥州旅行の行程と全く一致している。奥の細道の旅行目的は、陸奥の歌枕を尋ねる事にあつたが、同時にそれは西行法師の足跡を辿る事であつた。西行法師の奥州旅行行程は、まず白河の関に立ち寄り、武隈の松・衣川・平泉中尊寺へと旅を進めて行つたのであるが、芭蕉もその行程を進めて、日本海に沿って北陸道を歩み、美濃国大垣に辿り着いたのである。

西行法師は能因法師を慕い、白河の関にまず立ち寄つて、能因法師の足跡を辿つて陸奥を歩み、松尾芭蕉は西行法師のその足跡を辿つて奥の細道旅行を行つた。言わば松尾芭蕉の奥の細道旅行は、能因法師・西行法師の旅行の上に成り立つたのである。松尾芭蕉の奥の細道旅行は、その紀行文の文章から、江戸深川を出発点とし、美濃国大垣をむすびの地としているが、芭蕉の心の中の出発点は白河の関であり、むすびの地は敦賀の種の浜ではなからうか。

松尾芭蕉は平兼盛「便あらばいかで都へつげやらむけふ白河の関はこえぬと」(拾遺和歌集卷第六別 三三九番)や、従三位(源)頼政「都にはまだ青葉にて見しかどももみぢちり志く白河の関」(千載和歌集卷第五秋歌下 三六四番)を白河の関で思い浮かべるのであるが、西行法師が「白川

の関屋を月の洩る影は人の心を留むる成りけり」(山家集下巻雑 一一二六番)と詠み、能因法師が「みちのくに、まかり下りけるに白川の関にてよみ侍りける」と詞書で述べ、「都をば霞とともにたちしかど秋かぜぞふくしら川のせき」(後拾遺和歌集第九羈旅 五一八番)と詠んだ事も思い浮かべて、「心もとなき日数重るまゝに、白川の関にかかりて旅心定りぬ。」(待ち遠しく心落ち着かない旅の毎日を続けているうちに白河の関までやって来て、やっと旅に徹する心に落ち着いて来た)と奥の細道に記している如く、白河の関に来て初めて旅行を続けて行く決心をする。そしてこの白河の関同様、能因法師や西行法師が足跡を残したと伝えられている象潟も芭蕉は訪れて、最終には敦賀の種の浜に立ち寄って、「潮染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とは言ふにやあるらん」(山家集下巻 一一九四番)に因んで、芭蕉は「波の間や小貝にまじる萩の塵」(奥の細道)を吟じている。

奥の細道旅行の種の浜から先の、芭蕉の詠句は全く見られない。敦賀から大垣までは約二十里(80km)の道程、当然木之本・春照・関ヶ原のコースを取って、大垣に入っているとされるが、この間の芭蕉の詠句は、奥の細道には全く収録されていない。この事について『おくのほそ道を歩く・大垣』(角川書店)には、この区間に芭蕉の詠句が

一句もない事を、「芭蕉にとつて千年以上前の壬申の乱はあまりに遠く、百年も経たない関ヶ原の合戦は、あまりにも生々し過ぎて、句作にならなかつた」と記しているが、貞享元年の野ざらし紀行の旅行では、関ヶ原の常磐御前の塚で、「義朝の心に似たり秋の風」と吟じ、不破の関では「秋風や藪も梟も不破の関」と吟じている。敦賀・大垣間は、西行法師の歌も、能因法師の歌も全く詠まれていない。従つて奥の細道旅行に関する芭蕉の関心も敦賀種の浜までで、奥の細道旅行の行程の始まりと結びは、白河の関に始まつて敦賀種の浜で結ばれるとすべきではなからうか。

松尾芭蕉の奥の細道旅行における敦賀宿泊の目的は、勿論種の浜の西行法師歌枕を訪ねる事にあつたが、芭蕉には更にもう一つの宿泊の目的があつた。それは氣比の松原から、八月十五夜の月を鑑賞する事であつた。

敦賀の氣比の松原は、駿河国三保の松原・筑前国虹の松原と共に、日本三大松原と言われ、月を鑑賞するという事は、松尾芭蕉の俳諧活動における最も重要な活動の一つであつて、貞享四年(1687)八月の鹿島紀行、元禄元年(1688)八月の更科紀行は、共に八月十五夜の月の鑑賞を目的としている。

芭蕉は八月十五夜の氣比の松原の月の鑑賞の為に、前日の八月十四日敦賀到着という時間調整を行つて、宿に泊つたのであつたが、その八月十四日は殊更に月が晴れて、芭

蕉は「国ぐゝの八景更に氣比の月」(荊口句帳)と詠み、国々には近江八景とか伊賀の八景とか、八景と称する様々な美観を呈する場所があるが、この氣比の海や氣比神宮の上に出る月の美観は殊更であると興奮して、宿の主人に「明日の夜もかくあるべきや」と言ったところ、宿の主人は「越路のならひ、猶明夜の陰晴はかり難し」と言つて、芭蕉の不安を煽る。案の定翌十五日は終日降雨で、「名月や北国日和定めなき」の句を芭蕉は得た。

松尾芭蕉は八月十四日の夜、宿の主人に勧められて、氣比神宮に夜参しているが、この氣比神宮参詣も、敦賀宿泊目的の一つだったのではなからうか。松尾芭蕉が氣比神宮についての知識を、どれ程心得ていたかどうかは不明であるが、逸文越前国風土記に「風土記に云はく、氣比の神宮は宇佐と同体なり。八幡は応神天皇の垂跡、氣比の明神は仲哀天皇の鎮座なり。」と記されていて、氣比神宮が宇佐神宮と同体であるという事から、氣比神宮は八幡神社系統、即ち両部神道系統であり、芭蕉は逸文越前国風土記の内容を心得ていて、心置きなく氣比神宮を参詣する事が出来たのではないかと思われる。

幾度も述べる事であるが、松尾芭蕉の旅行は西行法師の旅行あつての旅行であつて、西行法師の旅行がなかったとしたら、また芭蕉が敬愛する西行法師の存在がなかったと

したら、芭蕉の旅行は大きく様変わりしていたのではなからうか。いや、芭蕉の旅行そのものが存在しなかったかもしれない。

松尾芭蕉の奥の細道旅行の北限は象潟であるが、芭蕉は西行法師の陸奥での足跡を辿つて、更に北方に足を伸ばしたかったのではなからうか。幻住庵記(米沢家本)に「猶うとふ啼そとの浜辺より、ゑぞが千しまをみやらむまでと、しきりにおもひ立侍る」(善知鳥の鳴く外の浜辺から、蝦夷の千島を眺めやる所まで行きたいものだとしきりに心が逸つた)と記されている。外の浜は卒都の浜とも表記し、津軽半島中央部にあつて、陸奥湾に面しており、西行法師の歌枕である。しかし芭蕉の健康を氣遣つて曾良に止められている。

元禄三年(1690)四月六日から七月二十三日までの松尾芭蕉の幻住庵滞留は、前述の如く膳所の門人菅沼曲翠が芭蕉の健康を氣遣つて、芭蕉の四国行脚の思いをとどまらせた事による。幻住庵の屋根の雨漏りを防ぎ、垣根の綻びを繕つて、芭蕉を幻住庵に留めさせた事が、幻住庵記初稿本に記されている。曾良が奥の細道旅行中、芭蕉の外の浜への旅行を思いとどまらせ、曲翠が芭蕉の四国への旅行を思いとどまらせた事は、共に芭蕉によって幻住庵記に記されているが、芭蕉がこの幻住庵記に書きとどめた事は、芭蕉の二人に対する愚痴にも思えるが、芭蕉の健康を氣遣

う二人の門人の心遣いに感謝の気持ちを表す芭蕉の心遣い
だったのではなからうか。勿論西行法師行脚全行程を旅す
る松尾芭蕉の、無念の気持ちも表わされている。西行法師
の足跡を辿る事が、松尾芭蕉の旅行の目的の全てであった
事も色濃く表現している。

再度述べる事になるが、松尾芭蕉の六回以上の伊勢神宮
参詣は、勿論松尾芭蕉の伊勢神宮に対する厚い信仰からで
はあるが、西行法師の六年間の伊勢滞留なくしては果たし
得なかつた事と思われる。

参考文献

岩波書店日本古典文学大系風土記

同 山家集・金槐和歌集

同 芭蕉文集

同 芭蕉句集

岩波文庫おくのほそ道 附曾良随行日記

小学館新編日本古典文学全集風土記

同 松尾芭蕉集①全発句

同 松尾芭蕉集②紀行・日記編・俳文編

京都書房 小倉百人一首

角川書店 おくのほそ道を歩く 敦賀

角川書店 おくのほそ道を歩く 大垣

角川書店 新編国歌大観 拾遺和歌集

同 後拾遺和歌集
千載和歌集

(つねまつ ただし)